鎌倉・九条の会ニュース

第９号　２０１１年６月　発行

鎌倉・九条の会
TEL:0467-24-6596
FAX:0467-60-5410
0467-24-6577

Email:iza@kamakura9-jo.jp
HP:http://kamakura9-jo.net

〈井上ひさしの言葉を心にきざんで〉「憲法のつどい２０１１鎌倉」

「取り返しのつかないことを取り返す」日々に向かって

発足六周年を迎えた鎌倉・九条の会主催「憲法のつどい２０１１鎌倉」が四月九日（土）、鎌倉芸術館で開かれました。一年前のこの日、亡くなられた、当会呼びかけ人の一人井上ひさしさんを偲び、「つどい」は、〈井上ひさしの言葉を心にきざんで〉と冠され、ゆかりの深い三人の方による講演会となりました。

東日本大震災によって、さまざまな心配が続くなか、参加者が続々来場、一五〇〇のホール座席はたちまち満席となりました。原発被災下の福島から避難してきている人の姿もありました。

「つどい」はまず主催者のあいさつのあと、大震災の犠牲者へ全員で黙祷をささげ、講演会が始まりました。内橋克人さん（経済評論家、鎌倉・九条の会呼びかけ人）、なだいなださん（作家、医学博士、鎌倉・九条の会呼びかけ人）、大江健三郎さん（作家、九条の会呼びかけ人）の順で講演がおこなわれ、小森陽一さん（東京大学教授、九条の会事務局長）の話で講演会は結ばれました。

井上ひさしさんを生み、育てた東北で発生した大震災、加えて原発事故災害によって、人びとの上に「取り返しのつかないこと」が覆い被さっています。惨禍のなかを被災者とともに私たちはどう生きるか。

「つどい」は、日本国憲法の精神、井上ひさしの遺した言葉を講師の方がたのお話によって、あらためてかみしめる場となりました。

「つどい」に参加した人びとは、「取り返しのつかないことを取り返す」という心を一人ひとりの胸に抱いて、会場をあとにしました。

内橋克人さん「不安社会を生きる」

内橋克人さんの講演は、井上ひさしさんの文学の原郷に思いを寄せながら始まります。

「井上さんがこよなく愛した故郷である東北。『吉里吉里人』や『ひょっこりひょうたん島』の舞台となった原風景は三月十一日の大震災で壊滅してしまいました。東北関東の甚大な被害が明らかになるなかで、『がんばろう！』『日本の力を信じる』などのスローガンがあちこちで聞かれるが、井上さんだったら、どういう気持ちでそれをお聞きになっただろうか。被災者にとっては、がんばるのはそっちではないか・・・私たちはもっと被災者に寄り添った繊細で鋭い感性をもつべきではないでしょうか」。

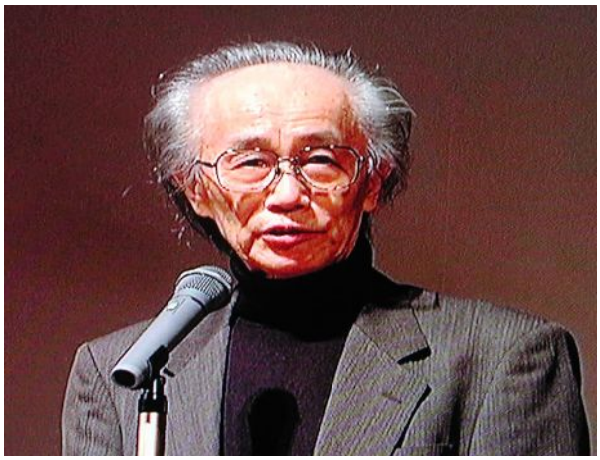
今回の大震災を内橋さんは、巨大複合災害と呼びます。自然災害と人災である原発事故が複合した大災害だからです。そして、「原発は安全だ！」という神話がどのように作ら

れてきたかを話しました。

「原発安全の神話づくりには三つの柱があります。一つは、原発への不安を報道するメディアに対して電気事業界が徹底した糾弾をおこなう。二つは業界発信にもとづく学習指導要領の原発版ともいえるようなもので、子どものときから原発はクリーンで安全だと教え込まれる。三つに著名な知識人らを招待し、通常入ることのできない施設内部を案内し、原発が安全であることを伝えさせる。――この三つをＰＡ（パブリック・アクセプタンス＝社会に受け入れられ認知を求めるための働きかけ）と称し、巧妙、緻密なやり方で原発への不安を持つ人びとを退けてきました」。内橋さんは、これはまさに戦前・戦中の軍国教育を彷彿とさせるもので、国民の世論が合意もされないうちに、一定の方向に誘導されていく怖さを感じさせるといいます。

憲法九条についても、私たちがこうした事態に目を向けなければ、「改正」神話に目をくらまされることになるのではないかとして、内橋さんは語っていきます。

「九条は非常に大切だが、それを取り囲んでいま何が動いているか、経済はどうなるのか、諸外国とのさまざまな協定はどうなるのかなどを知るべき。六〇年の安保改定は、私たちにとって重要な食べ物が完全に自由化されることにつながり、そこから日本の農業の衰退が始まった――こうした一本につながった流れを私たちは見抜かなければなりません」。



ついで、いまなぜ「不安社会」であるのかの話にうつりました。

「三つの理由があると思います。第一は経済的な変動で、そのしわよせが必ず社会的弱者のもとに集中する構造になっていて、私たちの生活の足腰を弱いものにしている。たとえば、失業しても失業保険を受けられない率が、きのうまでＧＤＰ世界二位といっていた日本で七七％、一〇〇人のうち七七人が失業保険を受けられない実態です。

第二に極めて不均衡な社会であること。海の向こうで始まったリーマンショックに日本が世界で一番影響を受けましたが、不均衡な経済社会だからこそ、経済の変動が社会全体にもろに広がったといえます。自立的な経済力が大きく失われてきているゆえにワーキングプアが生まれた。

第三に頂点同調主義。哲学者の久野収氏がこの言葉を使いましたが、頂点、つまり支配層、指導層のいわれるままに同調する。お上のいうことにすべて同調していくこと。てっぺんが間違えば国民全部が間違うことになる」。

このように内橋さんは語って、私たちは自分たちの社会を考えて、その三つの社会のもろさ、弱さを克服していかなければならないと指摘しました。

最後に「絆」という言葉があふれていることについ

２０１１年４月９日
「憲法のつどい２０１１鎌倉」
井上ひさしの言葉を心にきざんで
主催者開会挨拶

ご来場のみなさま、ようこそ、お出で下さいました。

東日本大震災で、みなさま、ご心配が続くなか、「憲法のつどい２０１１鎌倉―井上ひさしの言葉を心にきざんで」に、このように大勢お出かけくださり、ありがとうございます。

このたびの震災で、私たちは、無念にも絶たれた無数のいのちをこの胸にいだき、被災された人々が厳しい現実の中で生き抜かれていることを深く深く思い続け、そのこととつながって　このつどいにとりくみました。

こんな時だからこそ「井上ひさしさんがご存命なら、何とおっしゃるか」、私たちはお聞きしたい気持ちで一杯です。折りしも、３月末、朝日新聞読者の声欄に東京の大学生が『井上さんは故郷の東北をこよなく愛していたことでも知られる。もしご存命なら、今回の震災被害にさぞ心を痛められただろう、、。苦難の生活を強いられている東北の人たちに、いま笑う余裕などないかもしれない。けれど、この先、井上さんの遺志がきっと被災者の心の支えになると信じている。井上さんもそうあってほしいと天国から願っているに違いない。と、人形劇「ひょっこりひょうたん島」の歌詞にそれが凝縮されている。と述べ「苦しいこともあるだろさ、悲しいこともあるだろさ、だけど僕らはくじけない、泣くのは嫌だ、笑っちゃおう、進め」このように井上作品には「希望」がある』と書いています。

さて、みなさん、その井上さん、内橋さん、な

て話しました。絆とは、広辞苑を引くと、牛馬や犬を小屋に縛りつけておくための綱というのが第一の意味であり、束縛を感じさせる言葉でもあること。古き良き時代には絆があったとしても、それは自己犠牲を伴ったものであり、その絆を取り戻せば、「無縁社会」から脱せられるという解釈があるがそれには賛成できない、と内橋さんは語りました。

そして、北欧デンマークではかつての石油危機以来、市民共同発電による、風力はじめ自然の再生可能エネルギーを杖として、市民がエネルギー問題に対処したことを例に引き、一人ひとりが自立した人間として生き、連帯していくことが本来の愛に裏打ちされた絆であると講演を結びました。

なだいなださん「靖国合祀と憲法」

なださんは、いつものようにときおり会場に問いかけては聴衆の問題意識を掘り起こし、時に笑いを誘いながら話されました。

話はまず自分につく肩書きのことから始まります

「日本社会ではものを書く、あるいは話をする人に何か肩書きをつけたがるが、私はそれに縛られるような気がして「人間」とか「自由人」など提案してみたがほとんど受け入れられませんでした。一般には精神科医・作家というふうに呼ばれているけれど、私は「～科医」ではなく親しげに呼ばれる医者でありたい。それで最近は自ら「こころ医者」といいだし、「こころ医者講座」（筑摩書房）という本を出しました。

日本ではとかく専門医に頼りたがるがその専門医に何ができるか・・。私は、少なく見積もっても一〇〇万人といわれるアルコール依存症患者に対し、専門医が大変少ない頃から、その治療をしてきたけれど、アルコール依存を含め心の病気にかかった人を、専門医・看護師・心理学者や臨床医などが一緒になってもまだ足りず、支えきれません。そこで患者自身の自助グループを作り、それにも頼り、みんなで支え合う。これを考えなければ、日本で心の病気になった人たちを支えることはできない。だからみな一人ひとりが「こころ医者」の心構えを持ってほしい、という意味で本を書いたのです」。

なださんの話は大震災直後のことに移ります。

「震災直後の十六日、被災地仙台で『こういう時だからこそ「こころ医者」が必要』との主催者の意向で予定通り集会が開かれ、大変な強行軍で出かけましたが、下戸である私のような専門医には酒飲みの気持ちが本当には解らないのに、ましてや遠方で震災の被害を受けていない専門家が、ださんが呼びかけ人となって、6年前の6月「鎌倉・九条の会」が発足しました。「まさに人災の極みである『戦争』」。『戦争』はしないと決めた憲法九条こそが日本の進む道を示している――として、私たちは6年間活動してきました。

その井上ひさしさんが一年前のきょう、4月9日、旅立たれました。

井上さんは「むずかしことをやさしく」しかも的確に憲法について語ってくださいました。連続憲法講座、講演会、など、などと、たびたび九条の会の行事を気軽に引き受けられ、きょうも舞台袖から「やーどうも」と出ていらっしゃるのではないか、、と私たちは思ってしまいます。

一年目のきょう、井上さんと親交の深かった大江健三郎さんをお迎えすることが出来ました。鎌倉・九条の会呼びかけ人の内橋さん、なださんもお出でくださりさらに「九条の会」事務局長の小森陽一さんも駆けつけてくださいました。

さらに、今日のつどいには、遠方から参加された方々も多くいらっしゃいますが、とくに被災の各地、福島九条の会など大変ななか、ここにお出でくださっていることを、みなさまにお知らせいたします。

本日は、講師のみなさんのお話をじっくり聞いていただけるよう、つどいの下支えをする私ども一五〇人以上のスタッフが今日まで準備し、本日の運営に取り組んでいます。

その中の一人として、井上ひさしさんの伴侶である井上ユリさんも頑張っています。

私どもは、ご参加のみなさんとご一緒に、「平和のうちに日々の暮らしがおだやかに続く」そんな時をつくりあげるために、今夜も、一歩前に進む夜となることを願っています。

みなさん　最後までどうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

被災地で心に傷を負った人びとに『話を聞いてあげましょう』とはとてもいえない。ただ、『今後同様の災害にあった人たちのために、何か役立つこともあるかもしれないから、勉強させて下さい』という気持ちで、その人たちの話を聞くことは意義のあることと考えました」。

話は靖国の話に入ります。

「私は作家としては軽くみられるが『常識人』であります。『常識』ということばの基はコモンセンス（common sense）という英語。日本では何故かカント系の観念哲学がはびこってしまい、知らない人が多いが、十八世紀のスコットランド学派に「常識哲学」というのもあり、数学的公理や自我の存在を基礎にする。反常識派には、人間を自由にすると無秩序になり、世界は混乱状態になるという主張があったけれど、（常識学派が出て）やがてアメリカ独立を大いに支え、自由主義革命・自由主義経済原理が起こった。アダム・スミスも常識哲学者の一人です」。

こう前置きして、なださんの話は大詰めとなります。

「靖国の問題にはみんなが触れたがらなくなり、なかなか取り上げてくれませんが、つい最近『靖国合祀訴訟』というのがあり、『靖国の合祀は憲法違反とはいえない』という判決がでました。その合祀された祭神は、たった二歳の子どもとその母親です。この話、知っていますか？知らない人が結構いますね。沖縄戦で日本軍に退避壕から追い出されたために砲火で死んだ二歳の子どもと母親、そのことを考えると、訴訟を起こした沖縄の人たちの気持ちがよくわかる。本来、侵略戦争で外国に攻め込み、そこで死んだ人たちを顕彰する神社だった靖国は、英語ではウォーシュライン（War Shrine）＝戦争神社です。『靖国』を、私がいろいろ教えるよりも、皆さんが自分で調べた方がしっかり頭に残ると思うので、調べ、『靖国』というものの偽善性を考えてみてください」。

大江健三郎さん
「九条を文学の言葉として」

大江さんは井上さんと作品の趣きは違いながら、たがいに真底から理解し合い、二〇歳代半ばごろから交流を続けてきたと述べて講演が始まりました。井上さんが重い病気で入院、病床で書かれたノートから大江さんの小説への感想の部分が紹介されました。

大江さんの書き下ろし小説『水死』をおくられて、病床ですぐに読んで記されたものです。大江さんには障害をもった息子さんがいます。小説の中ではアカリという名前です。井上さんは次のように記しました。

「圧倒的なアカリ君の存在。真に人間的な事柄以外では和解しない」と。

大江さんは話します。

「小説のなかで『私』とアカリがあることで衝突して不和な状態が続いていることを書いていますが、小説の最後のほうで、二人の間に和解の光が見えてくることになります。そこのところを見抜かれて、アカリ君は真に人間的なことでなければ和解しないと、井上さんはとらえていられる。私は本当にそのとおりだと思います」。そして大江さんは、いま〈最後の小説〉というべきものを書いているが、そこではアカリ―光のことを綜合的に、いままで書いてきたものをつなぐようにして書いていると述べ、それが完成したとき、かつて「長編小説では愛を描くほかの何ものでもない」と私に指摘していられた井上さんに「私は愛というものを書きましたから、これは長編小説というものではないでしょうかと申し述べたい」と話しました。

憲法九条を文学の言葉として

大江さんの講演は憲法の話に入ります。「私は子どものときから、憲法九条を文学の言葉として読んできました」と。十二歳のとき憲法が施行され、やがて四国のいなかの新制中学の図書館で憲法を読み、感心したことから話し始めます。――戦争中、先生から、君たちが大人になるのは兵隊に行って、天皇陛下のために死ぬためだといわれていたのが、もう戦争はないというんだから戦場で死ぬことはない。九条のところが

大変よいと大江少年は思った――。大江少年はあるとき、母親に憲法のとくに九条のところがいいといいます。母親は「九条がいいんですね。九条の何という言葉がいいんですか」ときます。学校へいって再び憲法九条を読み、「国際平和を誠実に希求し」という文章にいきあたり、家に戻って母親にいいます。「『希求し』という言葉がいいと思う。憲法を書いた人は悲しい感じがするほど、真面目にこの言葉を使っている」と。母親は答えます。「私もそう思う。書いた人はきっと身近な人を戦争であるいは空襲でなくされているのではないか」。

父と娘に響き合う『ありがとありました』

大江さんは「九条を文学の言葉として」読むと話して、再び井上さんのことに戻ります。「井上さんの文章が私たちを笑わせてくれる、解放してくれる・・・しかし、根本のところにきまじめなもののあることを感じさせてくれる」のは、戦中戦後をともに体験し、お互いの文学に共感し合い、九条の会にも集まるというようなことが、自分たちの言葉の感覚にあらわれていることを示しているのではないかと指摘します。

そして、井上さんの広島の原爆を題材にした戯曲『父と暮せば』を取り上げました。――原爆が広島に落ち、父・竹造さんが死んでしまった。生き残った娘の美津江さんは「うちはおとったんを地獄よりひどい火の海に置き去りにして逃げた娘じゃ。そよな人間にしあわせになる資格はない」と思い込んでいる。彼女の家には、お父さんの魂が帰ってきていて付き添っている。図書館に勤める美津江さんは、原爆資料のことで訪れてくる青年に好意を寄せているが原爆による死者たちを想い、青年とのことをあきらめようとしている。お父さんの魂は娘を説き伏せようとして――。このような大江さんの説明があって――

鎌倉・九条の会の女性スタッフを娘役に大江さんが父・竹造役として『父と暮せば』の最終部分が朗読されます。

――娘の美津江さんは、お父さんを「火の海に置き去りに」したと自責していますが、実際は父のからだを庇って救けようとしました。父・竹造はそれを思い出し「ありがとありました」といい、別れの最後に娘に向けた言葉、「わしの分まで生きてちょんだいよォー」が聞こえていたかといいます・・・。「おまいはわしによって生かされとる・・・あよなむごい別れがまこと何万もあったちゅうことを覚えてもろうために生かされとるんじゃ」「人間のかなしかったこと、たのしいかったこと、それを伝えるんがおまいの仕事じゃろうが・・・」といいきかせます。やがて父娘のあいだに和解の雰囲気が・・・父・竹造は奥へ去る。その背に娘は「おとったん、ありがとありました」。

朗読が終わって大江さんは話します。「井上さんは広島被爆についての文献を数知れず集め、念入りに読み、被爆者たちの証言からそのエッセンスを、誰の耳にもとどくような言葉で積み立て、ドラマをつくりました。娘・美津江がドラマの終わりで『おとったん、ありがとありました』というのと、父・竹造の魂があのときを思い出し、『ありがとありました』というのとが響きあっていることに私は感動します」。

この芝居についてもっと考えたいと大江さんは続けます。

「井上ひさしとともに偉大な劇作家である木下順二さんのある芝居（註・『神と人間のあいだ』第二部「夏・南方のローマンス」）に『取り返しのつかないことを取り返そう』というセリフが出てくるんです。元漫才師の女性がいて、かつての恋人がC級戦犯として南方で囚われ死刑になってしまう・・・彼女は、あの人をもう取り返すことはできない。しかし自分は『その取り返しのつかないことを・・・取り返そうと思う』と覚悟し、街の中を歩いていく――これが木下さんの芝居の一場面です。木下さんが書かれたこの言葉はどういうことでしょうか」。

取り返しのつかないことを取り返す

そして井上さんの『父と暮せば』を考えます。

「原爆で亡くなったお父さんを娘さんは自分の心に呼び寄せて、自分には未来があることをはっきりさせら

れる・・・そして、取り返せない死者となったお父さん、心のなかのお父さんに向けて、『おとったん、ありがとありました』という言葉が娘さんにわき起こってくる――こういうことを『取り返しのつかないことを取り返す』というのだと思います」。

大江さんは話をすすめます。

「大きな地震と津波で実にたくさんの方がたが亡くなった。その人びとは家族友人たちにとって取り返しのつかない存在となってしまった。しかし、家族友人一人ひとりは、取り返しのつかない死者たちを取り返そうと思っていられるに違いない。非常に苦しい作業を続けていられるに違いない。

また、いま進行中の福島原発事故は終わりが見えない。お百姓さんたちは、汚染された土地に米にしてもキャベツにしても、作物を植え蒔いてはならないと命令されました。農民の方がたにとって、これまで自分がその土地をやしなってきた。私のいなかでは土をつくるといいますが、地面を耕してきたということは、その人の人生ですよ。そこに何も植えることができないということは、本当に取り返しのつかないことをやられてしまったということでしょう。それから漁師の方たちは、自分たちの海に放射能で汚染された水が大量に流されたことをあとから知らされた。そして魚介類への不安を専門家がいい、人びとが怖れるという状態――これは本当に取り返しのつかないことが起こされているということです。また、将来の子どもたちを考えれば日本全体にかぶさっている放射能の問題は、あからさまに将来に向かって取り返しのつかないことです。しかし、災害に遭った人びとを含めて、この国の人びとの中に生まれる『取り返しのつかないことを取り返そう』という心の働きが実って一〇年後か二〇年後に、取り返すことができたという声が起こるかもしれません。そしてその人たちは、お互いに、あるいは犠牲となった人たちに対して、『ありがとありました』というでしょう。

人びとのそういう心の働きが実ることを私は**希求**します。

原子力発電所をこれだけ危ぶむなかで強大な核兵器の力によって世界を守るという核抑止論に 私たちは反対します。そして、現在の原発事故の経験に立って、いま五四基ある日本に新しく一四基を作る動き、そのために、このたびの原発事故は教訓だというような人間を許すことはできない」。

小森陽一さん
結びのことば

あの地震と大津波のとき、小森さんは井上さんの小説『グロウブ号の冒険』に寄せる解説の校正をしていました。数日後、文芸誌『すばる』に載る「井上ひさしの文学」という座談会の校正をいそぎました。切迫した状況のなか、『グロウブ号の冒険』も雑誌もできあがり、この日の会場ロビーに並びました。小森さんは「こうして井上ひさしさんの言葉は、いまも私たちに届けられています」と話し始めます。

「『ひょっこりひょうたん島』のモデルになった蓬来島が岩手県大槌町の沖合いにあります。井上ユリさんから解説を書いたことへのお礼のＦＡＸがきましたが、そのなかに、いまテレビで大槌町の加藤町長の遺体が見つかったと報じられたと記されていました。三月二十日のことです。翌々日の『朝日新聞』に二人の記者が次のように書いています。

『（蓬来島は）津波にのまれ、灯台も流された。ひょうたん形の丘も一部が崩れ落ちた。町職員の佐々木さんは「泣くのはいやだ、笑っちゃおう」という希望をもたらしてくれるのがひょうたん島。これから復興の旗頭になったらいい」と話した』」

小森さんは続けます。大槌の港は、江戸時代に盛岡藩最大の回船問屋の前川善兵衛が江戸との交易の拠点港としていたところであり、彼の別名が吉里吉里善兵衛。井上さんの長編『吉里吉里人』の記録係はこの吉里吉里善兵衛という設定になっていた。小森さんはこのように説明したあと、吉里吉里国のモデルとなった吉里吉里地区の約三〇〇世帯一五〇〇人の

うち、約三〇人が亡くなり、約四五人が行方不明という厳しい状況の中、被災者を世話する人の一人が「吉里吉里国は大変なことになったけれど、人びとの結束は強くなった。吉里吉里の人間であることを誇りに思う」と語っていると述べました。

ついで小森さんは、小説『吉里吉里人』のなかの沼袋老人が語る次の言葉を引用します。「日本国の人間たちよ、若くして死んでゆかねばならなかった同年代の人たちの、あの呻き声をもう忘れてしまったのか・・・兄弟たち・・・自立せる経済大国であるかのような・・・ずうずうしい幻想を、おのが祖国に抱いてはならぬ。・・・日本国が、よく働くことが取得の人びとの住む、小さな小さな資源小国であることを正視せよ」。

最後に小森さんは次のような言葉で講演を結びました。

「（沼袋老人の言葉）のように正視しながら、悪夢以上かもしれないいまの現実を生き抜いていく力を井上ひさしさんの言葉から、そしてきょうの三人の講演者の言葉から、しっかりと私たちは受け取って、この会場を出たあと生きていきましょう」。

＊以上のように採録いたしました。講師の方がたによる講演の要約、ならびに文章化の責任は「鎌倉・九条の会」にあります。なお、各講演にそれぞれの講演者が加筆補正したものを収録する（岩波ブックレット）が7月初旬刊行予定です。

井上ひさしと被災地東北

井上ひさしは１９３４年（昭和９年）に山形県南部の小松町（現川西町）で生まれました。

中学３年のとき、家庭の事情で故郷を離れます。一ノ関で数ヶ月暮らした後、弟と二人、仙台のラ・サール・ホームというカトリックの児童養護施設に入所します。高校（仙台一高）卒業後、やはりカトリックの上智大学に入学しました。ところが東京での生活になじむことができず、大学を休学し、当時釜石にいた母親のもとに身を寄せます。病院職員の仕事を見つけ、三陸で３年近く生活をするなかで、心を癒し、立ち直ることができました。作家になる決心を固めたのもこの時期です。

釜石時代を自伝的に書いた『花石物語』、柳田国男の名著にいどみ遠野の古老の語りを後世に遺そうとした『新釈遠野物語』、岩手花巻の詩人宮沢賢治を主人公にした『イーハトーボの劇列車』、大槌町の吉里吉里海岸はじめ三陸各地に残る**キリキリ**の地名を取った『吉里吉里人』など多くの作品に、岩手・三陸で生活した足跡をみることができます。

井上ユリ記

参加者の感想

アンケートのご協力ありがとうございます。いくつかを紹介します。

＊こんなに素晴らしいつどいをありがとうございます。井上ひさしさんの文章教室に通った何年か前、赤いペンで修正していただいた作文は、私のなによりの宝となっています。昨今の大変な日本を井上さんはどう見ておられるでしょうか？　（横浜・７０代・女性）

＊どなたも「言葉」を大切にする方だと思いました。困難な時代に一人ひとりが行動を起こさねばとあらためて思いました。（秦野・６０代）

＊素晴らしい会でした。胸の余韻というか埋火というかに、心の奥、心の奥底から励まされています。４人、それぞれの立場から発信される熱いものに打たれました。そして改めて、井上ひさしさんの大きさと、そして改めて東日本大震災の人災の酷さにも！（横須賀・６０代・男性）

＊内橋さん、救援と糾弾。大江さん、国の戦略にうかうか乗せられてきた私たちにカツを入れてくれました。義理がたく、怒らないわれわれがこのような状況を生みだすのですね。取り返せないものを取り返す、いい言葉です。忘れない、語りつぐことの大切さ。
（狛江・６０代）

＊大江さんの話は、作家としての言葉の重みが十分に伝わってきました。それと同時に井上さんの文章にもつ言葉の意義が一部ではありますが、わかったように思いました。大変感謝しています。大変すばらしい企画でした。
（市内・６０代・男性）

＊すばらしい会でした。４人の講師が「魂のり」として話をしてくださいました。あの真面目な大江氏が、笑い話を大真面目にするのが泣けました。ありがとう。
（町田・５０代・女性）

＊タイミングがベストだったと思います。不安を感じている人がいかに多いことか――このことが今日の満席にしたのだと思う。講演の３氏、いっぺんにはすごいです。いつまでも聞いていたかった。
（茅ヶ崎・６０代・女性）

＊内橋さんの話は何時も感銘深いが、今回の話も氏の人柄が全面的に出ており、共鳴するところ、極めて大であった。なだいなださん、アルコール依存症の話から靖国の話まで幅広い話で。大江健三郎氏、井上ひさし氏に対する賛辞をユーモアを交えて語られた。憲法九条の話。大江氏は真面目一点張りの方かと思っていたが、ユーモアも解し謙虚さ、人柄、温かさが感じられた。（横浜・７０代・男性）

＊いろいろ考えて生きていかなくては・・・と思いました。わが子（３歳）の未来のためにも。
（市内・３０代・女性）

＊３人の講師の方のお話は時間が足らず、もっとお話しされたい、もっとお聴きしたいと先生方も聴衆の私たちも思ったのではないでしょうか。しかしながら、短い時間ながら伝えられたいことがヒシヒシと伝わってきました。石川県から参りましたが、来てよかったと思います。
（小松・５０代・女性）

＊この１年間、井上ひさしさんの作品をずっと読み、観てきました。井上さんについて書かれたものも読んできました。大江さんの講演はけっして難しくなく、とてもやさしく、とても分かりやすいお話で、胸にすっすっと入ってきて、

〝福島〟から参加された方からお手紙をいただきましたので ご紹介します。

「日本の青空」はどこに

小高九条の会（南相馬市）
中里範忠

鄙びた地にありながら映画「日本の青空」の鈴木安蔵が生まれ育ち、日本文学の島尾敏雄や埴谷雄高にゆかりのある町として誇りにさえ思ってきた南相馬市小高区。

それがあの日以来、放射線にまみれた町、地震・津波が残したガレキをかたづけることもできず荒れ果てたまま閉め出され、人ひとりいない「死の街」に化してしまいました。

暴走し続けている原発はいまだに治まるきざしもない。このまま戻れなくなってしまうのだろうか。「日本の青空」はどこにいってしまったのだろうか。

この無念さをどこに向かって叫べばいいのだろう。神か、政府か、電力会社か、はたまたカネのために彼らに乗ぜられ追従した地元自治体や地方政治家に対してか。自分自身の不明に対してか。２０キロ圏内から逃避行を続けているとき以来ずっとこのことを反芻しています。

【憲法のつどい２０１１鎌倉】では、内橋克人さんが「安全神話がつくられてきた過程を徹底的に理解してほしい」と語りかけていました。憲法改悪にもＴＰＰにも通ずる推進派の手練手管を看破する眼力を養うこと。小高九条の会が依拠してきた街も人もいなくなってしまったが、断ち切られた糸を一本ずつ紡いでいくことこそが草の根の真骨頂であり、九条の会の初心ではないのかと思い直しています。
（2011.4.29）

井上さんのことを深くきざみこんでくれました。「やさしことをむずかしく」ではなく「むずかしいことをやさしく」の大江さんでした。井上さんの言葉に突き動かされて、新しい「最後の小説」に挑まれている大江さん。井上さんの言葉の力と大江さんの知性に感動しました。きっと、そこには「愛」がえがかれ、「真に人間的なことがら」がえがかれるものと、静かな気持でお待ちしています。大震災と原発事故に途方にくれ、報道に怒りの日々でした。どう生きるのかを考えながら鎌倉に向かったのでした。「取り返しのつかないものを取り戻していこう」という大江さんの自らへのよびかけは、この苦難の時代を生きる道標だとうとめることができました。そしてここに「希求」という言葉が重なりました。ほんとうにありがとうございました。つどいを準備され支えられた一五〇人のスタッフの方がたに心からのお礼を申し上げます。（杉並区・５０代・男性）

＊井上ひさしさんの生涯が、いかに真剣に真面目そのもので、庶民一人ひとりの真の自由と平和を求め続けてくださったものであるか、あらためてゲストのみなさまの講演を通しかみしめさせていただきました。命あるわれわれがその願いを無駄にすることなくしっかり引継ぎ、この九条を死守すべき活動を確実なかたちで続けていかなくてはの思いを深くいたしました。私はある町での取り組みを知っていますが、鎌倉と違って、発足当時のような力が感じられなくなっています。当初同調してくださったかたがたの情熱?がさめてしまったようで支援者の数が減ってきているのが確実に見取れます。鎌倉にあっては、力強く活動が継続されていてうれしいです。先細りを感じさせる地方の活動によい刺激となるといいのですが・・・。鎌倉のように恵まれすぎた環境（知名度の高い講演者をお呼びできる）が大きな助けになっていることはありがたいですネ。

（市内・６０代・女性）

当日の
東日本大震災
救援募金

ご協力ありがとうございました。

５９７，０６０円、集まりました。

早速、鎌倉市役所を通し「日本赤十字社東北関東大震災義援金」に送金しました。

未来世代にのこすもの
私たちは何を「決意」したか

九条の会講演会

２０１１年６月４日（土）
日比谷公会堂

毎回のことですが、日比谷公会堂を取り囲む長い行列ができていました。鶴見さん、澤地さん、奥平さん、大江さんの話しは、大震災後の日本中を覆う、無念さ、悲しみ、不安の中で、それぞれ立場や視点、考え方は異なっていても、九条の精神、志から目を離さず、同じ方向を見つめてのお話しでした。聞き終えて、全体から伝わってくるものは『未来世代にのこすもの　私たちは何を「決意」したか』のテーマでした。

杖をつきながら登壇された鶴見さんの話しでは、広島と長崎と続けて被爆した人の「何かもてあそばれたような気持ちだった」という言葉が心に残りました。話し終わったあとの長く続く拍手のなかに集まった人たちの九条への思いを感じました。

澤地さんは、歯切れのよいテンポで「もう皆で、世直ししかないではないですか」とよびかけられましたが思わず頷いてしまいました。

奥平さんの話しは、「沖縄戦での日本軍の集団自決強制」についての裁判で大江さんが勝訴したことを、「歴史的、政治的に大きな意味があります」と力をこめて話されていました。いま、話題になっている「教科書問題」で戦前の軍国主義教育を子どもたちに押し付けようとする人たちの動きを押し戻す力になると思いました。

大江さんは、日本国憲法前文に「決意」という言葉が二度使われていることに注目して、詳しく話してくださいました。「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを**決意**し」と「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと**決意**した」の２ヶ所です。大江さんがこの点を強調したのは、自分の中に感じる「あいまいさ」をこの憲法前文と重ねることによって「振り切ろう」と**決意**されたのかな、と自分で勝手に想像してしまいました。もうひとつ印象深いのは、井上さんについて「彼はこういう場ではいつも笑いをくれました。これからは彼の代わりを僕がやらねばと思っています」ということです。「九条の会」の呼びかけ人は、すでに小田

さん、加藤さん、井上さんの3人を失いました。でも大江さんは、これからさらに「九条の会」を広げ、深めていこうと強く決意されているのではと思いました。

最後に小森さんから各地の「九条の会」の多様な取り組みの報告があり、今年11月に「全国交流集会」を開催する旨の話しがありました。いま、国会では改憲を目指す議員連盟が再び動き出したとのことです。私たちも全国の「九条の会」の仲間と、いままで以上の連帯と交流を深めさらに平和への流れを強めていきたいものです。

世界の平和を創るタベ

スティーブン・リーパー講演会
被爆ピアノ演奏会

6月4日(土)夜、鎌倉生涯学習センターホールで行われた、鎌倉YMCA主催「世界の平和を創るタベ」に鎌倉・九条の会も協賛しました。

第1部の講演会は、『平和と憲法九条を守るために必要なもの―核兵器禁止条約』と題し、スティーブン・リーパーさんのお話しでした。氏はアメリカ人ですが、(財)広島平和文化センター理事長で核兵器の廃絶を訴えています。核兵器競争に歯止めが利かなくなり、地球温暖化で海が死にかかっているいま、唯一の被爆国であり、東日本大震災で原発事故を起こしてしまった日本は、世界に向けて核兵器廃絶を、平和を、訴える義務があると話されました。それは「国」が「誰か」がではなく、一人ひとりに「あなたがやるのだ」と言われているような、力強くも厳しい言葉でした。

第2部は奥平純子さんによる被爆ピアノの演奏。痛々しく傷ついたピアノから美しい音色が流れ、心の奥深くまで染み透りました。ボランティアで被爆ピアノを日本全国に運んでおられる調律師の矢川光則氏の強い意志にも感動しました。

約200人の聴衆も、満足げにホールを後にされていました。

お知らせ

☆講演会

9月19日（月・祝日）13時30分～
鎌倉生涯学習センター・ホール　　500円

講師；秋葉　忠利さん
（前広島市長、広島大学特任教授）

《世界に核廃絶を訴えてきた秋葉さんに、東日本大震災、福島原発事故を通して見えてきた私たちの社会のあり方について、お話しいただきます》

☆鎌倉・九条の会憲法学校

11月26日（土）11時～16時
鎌倉商工会議所・地下ホール　　500円

講師；渡辺　治さん
（九条の会事務局次長、一橋大学名誉教授）

予　定

1限目	；	11：00～12：30
休憩	；	12：30～13：30
2限目	；	13：30～15：00
質疑応答	；	15：00～

☆毎月の9の日行動

毎月9日に鎌倉駅東口でリーフを配っています。
短時間でもご一緒に！！

毎月9日　平日　　15時～
　　土・日・祝日　　11時～

☆商社九条の会・東京の講演会

「アフガニスタンに生命の水を」
ペシャワール会　中村　哲医師
2011年8月27日（土）14時開会
豊島公会堂（池袋駅から徒歩5分）
前売券1,000円　当日券1,200円
申し込み；上田裕子さん　FAX 03-3918-9262

ホームページをリニューアルしました。
一度ご覧ください。
HP：http://kamakura9-jo.net